

資料 1

銅造如来形立像（どうぞうによらいぎょうりゅうぞう）

<概要>

「銅造如来形立像」は、祐福寺¹住持住房に伝来し、もと近在の富士浅間神社御神体であったと伝えられる小金銅仏像である。像高約 10 cm で、頭頂から台座丸框までをほぼ一^{いっ}铸・ムクとし、如来像ながら螺髪²をつくらず素髪^{そはつ}で肉髻朱³および⁴白毫痕がない等、古代小金銅仏に多い特徴がある。

本像は內衣・大衣ともに右肩を露わにする偏袒右肩^{へんたんうけん}に着し、大衣の先端は腹前で折り返して左前膊^{はく}に懸かる。右肩を露わにする着衣の如来像は、わが国では白鳳時代から奈良時代前期にもっとも多くみられるが、これに加えて衣端を腹前で折り返し左前膊に懸ける例は全国的にも稀であり、8 世紀半ばから後半の早い時期における製作と考えられる。

奈良時代中後期の金銅仏は、その遺例が全国的にも激減しており、本像は 8 世紀半ばに遡る数少ない小金銅仏の古例であり、きわめて貴重である。

1 祐福寺：現在の愛知郡東郷町に所在し、鎌倉時代創建の浄土宗寺院。

2 螺髪：仏像の丸まった髪の毛の名称

3 肉髻朱：肉髻とは、如来像にみられる髪の毛ではなく頭がこぶのように盛り上がった形になっている状態で、肉髻そのものを象徴する印として肉髻の根元の前面に朱色の部分がついているもの。

4 白毫：如来の眉間のやや上に生えているとされる白く長い毛のこと。



銅造如来形立像（愛知県教育委員会提供）